



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1980 精道教育促進協会(定)電話三三・二四五―芦屋市船戸町12-6

教皇様の敵

主の晩さん

ヨハネ・パウロ二世教皇の手紙
(一九八〇年二月二十四日)抄訳

1 聖木曜日にあたり今年もみなさんに手紙を送る。今回の手紙は昨年同じ日のために司祭にあてた手紙(ヨハネ・パウロ二世の手紙「カトリック中央協議会」及びそのとき一緒に送った司教への手紙と深い関係がある。……)

聖体祭儀

3 聖体の祭儀は聖霊においてイエズス・キリストを通して父であらせられる神にささげられる。福音史家聖ヨハネが言うように、「おん子を信じる者が一人も滅びることなく永遠のいのちを得るため独り子を与えるほどのこの世を愛された」御父にまず向けられる。

またそれは救いの計画中とくに高間で、「これはあなたたちのために与えられる私の体である。……」これはあなたたちのために流される私の血の杯である。……)と言ひ、最高の奉獻と全き自己放棄を果した御子にも聖霊を通して向けられている。「主の死を思い」とミサ中に叫ぶとき実は主の死の瞬間を思う。復活を期待しながら我々は、復活に輝く主の来臨を期待しながら我々は、復活し栄光を受け、「御父の右に座したもう」キリストを尊敬の念をもって抱くのである。《しかしてキリストはみずからすすんで自分を空しくされ、

御父はそれを受けいれ、復活の栄光をお与えになった。》我々は復活と共に死を秘跡的に祝うことによって「死に至るまで、十字架の死に至るまでへりくだって従順であった」救い主を拝む。……
この愛の秘跡におけるキリスト礼拝は、聖体の前でする個人的な祈り、数時間にわたる礼拝、長短さまざまあるいは年毎の聖体礼拝(四十時間の聖体礼拝)、聖体賛美式、聖体行列、聖体大会など色々な形式の聖体信心にあらわされるべきである。……)以上はすべて、第二バチカン公会議中あるいは以後に改めて定められた昔からある総則や細則にのっとったものである。……)教会がそして世界中が聖体を切に求めている。この愛の秘跡においてイエズスが待っていてくださる。物おしみな心をもって主に近づき深い信仰の心で礼拝と観想に臨み、この世の重大な過失と罪のあがないに努めようではないか。願わくは我々の礼拝のつぎることなきよう。

聖体と教会
4 公会議のおかげで「教会はご聖体をつくり、」ご聖体は教会を築く」という真理をより深く悟ることができた。……)
聖体と愛徳
5 聖体の秘跡は全キリスト教生活の魂であることを再確認したい。事実キリスト教的生活は最大の掟を果すことによって実現される。ところで最大の掟とは神と隣人への愛の掟のことであって、それは一般に愛の秘跡と称される聖体の秘跡にこそ源をもつ。
《ユーカリスチアとはこの愛を意味する。》
従って聖体(ユーカリスチア)は愛を思いおこさせ、愛を現存させると同時に、「愛をもたらず」秘跡である。……)

聖体と隣人

6 《聖体のまことの意味そのものが隣人への積極的愛の実行の学舎となる。》これが主の教えたもうた真にして全体的な愛の命令であることを我々は知っている。「たがいに愛しあうなら、それによって人々はみなあなたたちが私の弟子であることを認めるだろう。」聖体によって我々はより深い愛に導かれる。キリストがパンとぶどう酒との外観のもと各自に同じようにみずからをささげたもうた事実をみると、我々の兄弟姉妹が神のみ前にかほどの価値を有するかがわかる。聖体に対する礼拝がほんものであるなら、それによって人間各自の尊厳をより明らかに理解するはずである。そしてこの尊厳に気づくことこそ「隣人との(愛徳にもとずく)関係の最も強い動機」となるだろう。……)

信者の生活と聖体

7 聖体は愛徳の源であるから、聖体こそつねにキリストの弟子の生活の中心であった。

聖体の秘跡はパンとぶどう酒の外観、つまり食べものと飲みものの外観をもつゆえ食べものや飲みもの同様に人々の生活になじみ深いものである。聖体において、「食べものと飲みものに似せて、自分から我々の存在をみだし、」食べものと飲みものようにいのちを保証するほどの親密さから、愛であらせられる神への我々の礼拝が湧きあがる。……)

(……)すでに私は告解の秘跡と聖体の秘跡との間にある密接なつながりについてみなさんの注意をひいた。《悔い改めは聖体に導くのみならず、聖体は悔い改めに導く。》聖体拝領においてお受けするのはどなたであるかを自覚するならばほとんど自然に我々の罪に対する悲しみと内的浄化の必要を感じると共にみずからの不肖を悟ることが出来る。

ところで、聖体におけるキリストとの出会いが単なる習慣におちいらぬようまた、妨げのある状態つまり大罪をもちつつ聖体を拝領しないよう注意を促したい。悔悛の徳を実践し告解の秘跡にあずかることは、得も言われぬかたちにあらわされた神の愛と神ご自身に對して我々が示すべき礼拝の心を維持し深めていくためにどうしても必要である。……)

聖体の神聖さ

8 (……)ミサ聖祭の聖なる性格とはキリストの制定された神聖さのことである。司祭の言葉と動作、それに対する聖体祭儀に集う信者の積極的意識的応答は聖木曜日の言葉と動作をほうふつさせる。

司祭は聖なる犠牲を in persona Christi (キリストのペルソナにおいて) ささげる。「キリストのペルソナにおいて」とは、「キリストのみ名によって、あるいは「キリストのかわりに」というよりもはるかに深い意味をもつ。《ペルソナにおいて》とは《永遠の司祭》との秘跡的にして独特な一致を意味する。ここでいう大司祭とは自らの犠牲のささげ手で

あると同時にささげ物であって、だれもその代理を勤めることはできない。キリストのみ今も昔も真にして効果的に「我々の罪と世の罪のあがない」となり得るのである。

犠牲

9 聖体はなによりもまず犠牲である。それはあがないのいけにえであり、新約の犠牲である。我々も信じ東方諸教会も告白する。

「ギリシヤ教会が何世紀も前に述べたように、今日の犠牲は受肉したみことばであるおん独り子によってささげられたもので今も昔の如くおん子によってささげられる。両者は唯一にして同じ犠牲だからである」と。(…)

犠牲のささげ手である聖務者はまことの司祭であって叙階の秘跡が与える権能を行使し、被造物を神にお返しするという真の犠牲をささげる。ご聖体にあずかる人々は司祭と同じ仕方て犠牲をささげるのではないが、祭壇にそなえられたパンとぶどう酒であらわされる《霊的犠牲》を共通の司祭職によってささげるのである。(…)

神のみことばの食卓

10 初代から聖体祭儀は祈りのみならず聖書朗読や会衆のうたう聖歌と深い関係をもっていたことを我々は知っている。そこから教父たちにならって教会はミサを二つの食卓にたとえてきた。教会は二つの食卓によって教会の子どもたちに神のみことばと聖体つまり主のパンを準備する。そこで聖なる奥義の最初の部分、つまりみことばの祭儀と称される部分に目を戻してみよう。

(…)公会議の規定に従い新しい朗読が作成された結果、継続した朗読と聖書全体の朗読が可能になった。答唱詩篇を加えることにより旧約聖書の祈りと詩の宝庫に親しむこともできるようになり、朗読も自国語でなされ誰もがより深く理解できるものとなった。

しかしラテン語による典礼の時代に育った人々は《共通のことば》の不足を感じている。ラテン語は世界中で教会の一致をしめすことばであったし、その尊厳化された性格ゆえに聖体が奥義である事実をよりよく示してきた。従ってこのような人々の感情や望みを理解するのみならず充分に尊重しなければならない。新しい規則にもあるようにできるだけかけられぬ感情や望みをかなえなければならぬのである。(…)

主のパンの食卓

11 聖体の奥義のもう一つの食卓、つまりパンとぶどう酒との食卓も現在の典礼改革の点から省察を加えられねばならない。これは重要な点である。というのも初代から証言されている通り、《ミサは、聖体拝領において我々一人ひとりの心と良心、舌と口に食物のかたちでご自分をお与えになるキリストへの礼拝》をあらわすから。(…)

主のパンの食卓としての聖体は我々に対するたえざる招きであることを忘れてはならない。典礼においてこの点は「神の小羊の食卓に招かれた者は幸い」ということばにも、万人周知の婚宴に招かれた人々のたとえにもあらわれている。(…)一般によくみられるのは、自らの不肖を感じるというよりも内的心構えの不足である。このような表現が許されるならそれは聖性への《飢えと乾き》の不足、偉大な愛の秘跡への感受性および秘跡の本質に對する理解不足であると言えよう。

最近では、ミサにあずかる人々全員が聖体を拝領するという現象がみられる。ところで、経験ある司牧者の証言によると、良心を清めるために告解の秘跡に近づくよう意を用いる人は少ない。これは、最高のよろこびであるキリストとの秘跡的一致をさけるべき理由が神の掟に照らしてみても良心にみあたらないことを意味する。しかし時には、このような現象

の裏に、ミサは会食にすぎない、言いかえればキリストの御体を受けることによって兄弟的交わりを表わすにすぎない、という考えが潜んでいることもいえない。このような理由にある種の世間態に留意する態度と単なる順応主義を加えるのは容易なことだろう。

このような現象に対しては油断のない配慮と強い責任感に裏うちされた神学・司牧的分折が要求される。キリストの共同体がキリスト教的良心のよき感受性を失うようなことは見過されてはならないのである。聖体拝領によってキリストを受けるとき我々の心は主をお受けするにふさわしい住居でなければならぬ。この問題は、告解の秘跡と密接な関係があるのみならず、倫理に関する教えの遺産全体、および聖体にあずかる各自が良心の奥で下す正しい判断の基準、つまり善悪の正確な区別に対する責任感とも関係がある。聖パウロの「おの自分の自分を調べよ」は周知のことばである。ここでいう判断こそ聖体を拝領するか否かを個人的に決定するために必要欠くべからざるものである。(…)

ある国では手で聖体を受ける方法を導入している。これは各国司教団が個々に申しでたものに聖座が認可を与えた場合である。ところでご聖体に対する嘆かわしい不敬の例も報告されている。このような不敬の種は個々人に掃せられるはもろんであるが、信者の聖体に対する態度について十分な注意を払わないう司牧者の責任でもある。(…)

また、手で聖体を受ける方法が認められているところでは時として、口で拝領したいと思う人々の自由が考慮されていない(が、この点にも注意が必要である)。(…)

教会の共有財産

12 聖体は教会の一致の秘跡として全教会の共有財産である。従って教会は聖体への参与とその祭式に関する事柄すべてを明白に規

定する重大な義務を負う。ゆえに公会議が規定する原則に従わなければならない。(…)

さらにこの分野において聖座の各聖省が発布した指導指針にも従うべきである。(…)

第二バチカン公会議がしめした聖体祭儀の多様性の範囲内で、聖体がそのしるしであり原因となる教会の一致を明白に表明する努力が切に要求される。(…)

ミサをたてる司祭はみな、ミサの犠牲の間祈っているのは会衆と自分だけではなく教会全体であって、教会はこの秘跡ととくに《認可された典礼文》の使用によって教会の霊的一致を表現するのである。(…)

神の民全体の善を守る職務を教会から委託されている聖務者のこの奥義に對する従順は聖なる犠牲に関する典礼法規の遵守という態度にあらわれなければならない。このような規則の一つとして例えば服装とくに司式者が着用すべき祭服をあげることができよう。(…)

《通常の状態》にありながら典礼の指針を無視するならば、それは個人主義あるいは流行の意見に對する批判力の不足、あるいはまた《信仰の精神の不足》から生じる聖体への不敬とみなされても仕方あるまい。

神の《恩恵》のおかげで聖務者とされた我一人ひとりには我々の司牧に委ねられた兄弟姉妹の考えや態度に對する大きな責任を負っている。愛の秘跡のうち現存し働くキリスト、そのキリストに對する健全な礼拝(精神)を育てるのは我々の召しだし(からくる義務)であって、それはなにかんなく我々一人ひとりの模範によって示さなければならない。「伝統的」ではあっても健全な信心表明であり、とくに、第二バチカン公会議が想いおこさせたように、神の民全体が有する「信仰の感覚」の表明である聖体礼拝の種々の表現形式に慣れた行ないをさけるために神にお助けを願うしだいである。(…)

若者たちよ

ボストン・コモンに
おけるミサの説教
(一九七九年十月一日)

私は若い人々を見ることに彼らのうちに生きるよろこびと情熱、そして魅力と可能性を秘めて前途にひろがる存在のより深い意義と真理追求の心を見つめる。

今夜はこれまで若い人々に語ってきたことをもう一度くりかえしたい。君たちは人類の将来を背負っている、「明日は君たちのものである」と。福音書にはイエズスとあの青年との間に交わされたすばらしい対話が書き記されている。そこにはだれもがたずねる根本的な問題があつた。青年によって提起されている。「私は何をすべきでしょうか。」(マルコ10・1)

そして、イエズスは彼をじつと見つめ、いつくしんで彼におおせになった。私について来なさい。(同10・21) そののち何がおこつたのだらうか。根本的な問題にあれほど関心をよせていた若者は「悲しそくに立ち去つたのだ。彼は大金持だつたからである。」(同10・22) そう、彼は立ち去つた。前後の文脈からもわかるように、あの青年はキリストの呼びかけを拒んでしまつたのである。

この心打つてき事はわずかな言葉でではあるが簡潔、雄弁に多くの教訓を与えてくれる。このでき事には今の私たちにも直接に深い関係を有する本質的・根本的問題が含まれています。いづれにおいても若い人々は意義深い質問を投げかけているのです。人生の意味について、正しい生き方について、諸価値を計る真の尺度について。「私は何をすればよいのだらうか。」「永遠の命を得るためには何をすべきなのでしょう。」と。このような君

たちの問いかけは君たちの思想と良心、心と意志の中味を証してくれる。君たち若人が善なるもの、真なるものに対する偏見のない開けた心をもっていることを人々に語りかけていることを示しているのです。この偏見のない率直さはある意味で人間精神の「革命」とでも呼べるものであつて、そのおかげで君たちもあの福音書の青年の体験を多少とも自分のものとすることができた。「イエズスはじつと彼をみつめ、いつくしんだ。」(マルコ10・24)

キリストの呼びかけに耳を傾けよ

そこで君たち一人ひとりに言いたい。「私について来なさい」と招くキリストの呼びかけに注目せよ。(主は)私の道を歩め、私の世になる。選ぶべき道が与えられている。キリストとその生き方、主の愛の掟を君たちは選ぶことができるのだ。

キリストの伝える愛の使信はつねに重要なつ適切であります。現代世界がその美と荘厳、科学技術の征服、精練された数多くの物を提供するにもかかわらず、人々がより一層の真理と一層の愛、より多くのよろこびを切に求めている事実は理解するに難くない。ところで、人々が求めるこれらすべてはキリストとキリストの生き方のうちに見出すことができ

るのです。君たち若きカトリック信者に私が次のように言うのはまちがひだらうか。憎悪と怠慢あるいは利己主義が世界を支配しようとするとき、人生の真の意味を人々に告げ知らせるの

はこの世で生活を営む君たちをして教会の仕事のひとつである。困難や失望に見舞われたとき、多くの人は己れの責任から逃れようとする。利己主義や性の快楽、麻薬や暴力のうちに、あるいは無関心や皮肉な態度を装つて身を隠そうとする。しかしながら私は今日、このような逃げの手ではなく逆に愛の道を選べと提案したい。キリストの愛を心から受け入れるなら、その愛によって君たちは神のもとに導かれることだらう。ひよつとすれば司祭職か修道生活に導かれるかもしれない。あるいは、兄弟姉妹たちへの特別な奉仕活動か、とくに困っている人貧しい人々、孤独な人や見捨てられた兄弟、権利を踏みにじられた人たちが最低必要なものさえ得ることのできな

い人々への奉仕であるかもしれない。いずれの道を進むにしても、そこにキリストの愛が光りかがやくような人生にしようではないか。君たちが色々な方法で人々のために身を挺することによって、神の民全体がこの上なく豊かになることだらう。何をすに付けてもキリストは、何らかの方法で神を愛し隣人を愛するよう、つまり君たちを愛ゆえの奉仕に招いておいでになることを忘れないで欲しいと思ふ。

愛は多くを要求する

あの若者の悲しそうな様子を見ると深く考えさせられる。この世の物や財産がたくさんあれば幸せになれるだらうと考えてしまふ人もいるだらう。ところが福音書の若者の場合をみると、実は多くの財産が妨げとなつてイエズスの「従え」という招きに応えられなくなつてしまつたことがわかる。彼には己れを否定してイエズスに「はい」と答える用意ができていなかった。逃避を拒み、愛に応える心構えがなかったのである。

真の愛は(多くを)要求するものです。この点を明白に言わなければ私は自分の使徒と

しての使命をなござりにすることになるでしょう。「私の命じることを守れば、あなたたちは私の友である。」(ヨハネ15・14)とおおせになつたのは主ご自身であるからです。愛は神のみ旨への委託と努力を要求する。その愛に応えるということは規律(修徳)と犠牲を意味するが、同時にそれはよろこびと自己完成をも意味するのです。

愛すべき若者たちよ、誠実な努力をおしまず、よく働くことを忘れないで欲しい。真理を恐れてはならない。キリストの助けと祈りによって、誘惑や気まぐれやその他色々なことのできるのです。福音書のキリストに、主の愛と真理とよろこびに、心の扉を開きなさい。悲しそくに立ち去るようなことがあつてはならないのです。

今夜わたしの話を聞くあなたたち全員に、話を終えるにあたり言っておきたい。アメリカを巡る私の旅の目的・使命は、お年寄りも若人をも含めてあなたたち全てにキリストのみ名において「私について来なさい」と告げることなのです。

結婚している人たちに言います。キリストに従いなさいと。互いに愛をわかち、重荷を重しなさい。神が二人を通してお与えになる生命をよろこびをもって迎え、子供たちのために結婚を安定した堅固なものとしてくださ

い。独身のあなた、あるいは婚姻を真近にひかえる君たちに言いたい、キリストに従え。お年寄りにも若者にも、病をもつ人にも若い人にも、痛みを苦しむ人にも手当を要する人にも、愛を求め人にも友を求め人にも私は言います。キリストに従いなさいと。

キリストのみ名において、この呼びかけ、この祈り、この願いを私はすべての人々に伝えたいのです。

聖体と悔い改め

回勅 人類の救い主

20番(抄訳)

(小見出しは訳書)

ご聖体は秘跡的生活の中心であり頂点

(…) イエズス・キリストの救いのみわざにおいて教会は(…) 師キリストの福音にあらずかと共に、秘跡とくにご聖体の秘跡という具体的なかたちに示された救いの力にもあらずかる。ご聖体は秘跡的生活の中心であり頂点であります。信者はそれぞれ諸秘跡にあずかることによって救いの力を受けるが、秘跡生活の最初にくるのは洗礼であって、この秘跡において我々は復活にあずかるためにキリストと共に葬られる。以上の教えに照して考えると、ご聖体こそ教会と信者各自の秘跡生活全体の頂点であり充満である理由が一層明らかになります。事実ご聖体においてキリストのみ旨により犠牲の奥義がたえず更新される。十字架上で自分をささげたキリストの犠牲がくりかえされるのです。御子が「死に至るまで従う」ことによりささげた犠牲をよみせられた御父は、報いとして復活による新たな不死の生命を御子にお与えになった。御父は初めから生命の源であり与え主であるからです。キリストの体の光栄を意味するこの新たな生命はキリストと一致する人々に(…) 神的生命を与えるしるしなのです。

キリストとの一致は十字架のおかげ

キリストとの最も完全な一致を成就するのはご聖体の秘跡であります。(…) とくでこの一致は我々を「高値」であがなった救い主の犠牲のおかげで可能となりました。我々のあがないのために支払われた代償は我々のうちであって、キリストに生きる人間の尊

厳を示すのです。我々は本当に「神の子」「神の養子」、神に似たものになると同時に(…) 「王の司祭職」、つまりただ一度永遠に我々を御父のもとに立ち返らせた永遠の御子であり真の人である御方のみわざにあずかることができました。(…) 我々はおのおのまず御子が成就し今は教会の聖務者を通してつねに成就される御父との和解のみに(…) あずかることができるのです。

典礼法規の遵守はご聖体への愛の顕われ

教会はご聖体のあふれんばかりの力によって生命を保ちます。この秘跡のすばらしい内容と意味については今日に至るまでしばしば教会の教導職が表明してきたが(…) 神学者の深い造詣や篤い信仰と祈りの人々、隠遁者や神秘家の支持するこの教えも実はご聖体に関する理解のほんの一端にすぎない。ご聖体の豊かな内容、その意味、この秘跡において実現されることをことごとく理解しましたそれを言葉に表わすことは到底不可能であるからです。(…) 教会の熱意とくに目に見える恩恵と超自然の力の源は、秘跡中心の生活に堅忍し進歩すること、ご聖体中心の雰囲気の中での霊的進歩、ご聖体への信心のうちに求められねばなりません。従って、至聖なるご聖体の崇高さとその本質的な意味を思いや行いや生活によって軽視するようなことは不当であることがより一層明らかになる。ご聖体は、秘跡であり犠牲、秘跡であり交わり、秘跡であり現存であります。ご聖体の秘跡がキリストの弟子や証聖者たちの兄弟愛のあらわれであったことは確か、また今もそうでなければ

なりません。しかしだからと言ってこの秘跡を兄弟愛表明の単なる「機会」とみなすことはできない。この奥義の内容すべてが尊重されなければなりません。実際に現存するキリストを拝領し、心は恩恵に満たされ、未来の栄光の保証が与えられるこの秘跡的しるしの意味がますますところなく受けいれられなければならないのです。ここにおいて典礼法規および共同の神礼拝を証することがらすべてを厳密に守る義務が生じます。人間の弱さや習性、情性、はては侮辱的な態度さえ全く気にかけないと思われるほどの神の人間に対する無限の信頼を思うとき、なおさらこの義務の重大さに気づくのであります。教会の全信者とくに司教と司祭にはこの愛の秘跡が神の民の生活の中心であるように、またあらゆる種類の礼拝行為を通じてキリストの「愛に愛をもって」応じるによりキリストが信者の靈魂のまことの生命となるよう監視する義務があります。「パンを食べ、さかずきを飲む毎におのおの自分を糾明せよ」という聖パウロの勧めを忘れるわけにはゆかないのです。

ご聖体と悔い改め

使徒の言葉は少なくとも間接的にご聖体と償い(悔い改め)との密接な関係を示している。実際キリストの最初の教えと良きおとずれが「悔い改めて福音を信じなさい」であるなら、ご受難と十字架と復活の奥義は人々に対する悔い改めへの招きを強調するものと考えられます。ご聖体と悔い改めとは、ある意味で、福音に従う真のキリスト教的な生活にみられる分ち得ない二面を表わすのです。ご聖体の宴に招くキリストこそ実に、「悔い改めよ」と繰り返すキリストであります。日々新たな回心への努力がなければ(…) ご聖体の効果が得られないか弱められるか、いずれにせよ、本質的普遍的にキリストの司祭職に参与させるはずのこの霊的な犠牲にあずかるに当たり充

分な心の準備のできていないことになる。キリストの司祭職はキリストの御父への奉獻と一致しています。キリストの奉獻は無量の価値を有するゆえに、あまたの制限を負う我々はつねにより一層の円熟を目指し、たえずより深い悔い改めの心で神に向かわなければならぬのです。

ご聖体と告解

教会の伝統にもとづいて教会におけるつぐない特に告解の共同体的な面が近年明らかにされた。このような努力は有益であり現代におけるつぐないの実践を豊かにすることでしょう。ところで回心とは特に深い内行的な行為であって、人はこの内面的回心を他人に代行させることも共同体に転嫁することもできません。兄弟的共同体の回心の儀式に参加することによって信者おのおのの回心が大切にけられることでしょう。しかし決定的に大切なことは各自が良心の奥底から罪を意識し、神に信頼をおいて神のみ前で、「私はあなたに對し罪を犯しました」と詩篇作者のように自分の改心を表明することなのです。教会は何世紀にもわたり続いてきた告解を守護する。各自の告白および痛悔と生活を改める決心、償いを果す意志からなるこの秘跡を守護することによって教会は人間のもつ特別の権利を守るのです。告解は「あなたの罪はゆるされた」「行け、二度と罪を犯さぬように」という聖務者のことばをもって我々の罪をゆるすキリストとの個人的出会いである。(…) またそれはあがなわれた人間に対するキリストの権利であり(…) 私たちが自分自身と出会う権利でもある。教会はこの秘跡を守ることによって人間の内的現実、有罪性、良心の望みに応えと共に(…) 救いの奥義への信仰を告白します。「幸いなるかな、義にうえかわく人は(…) ゆるしの秘跡によって我々は救い主ご自身の義(聖性)にみたされるのです。(…)」

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説したしにそのまま伝える月刊紙。毎月二十五日発行。定価 一部六十円送料五十円 半年分予約三百六十円送料三百円 一年分予約七百二十円送料六百円(一部の送料で三部迄送付可能) 二十部以上の一括購入なら送料不要 替 振 神 戸 1072393